

実践報告 (Report)

## 地域の自然との関わりを深める生活科学習

—天白川での活動を通して—

**Seikatsuka (Living Environment Studies) learning with relation to local nature in a Japanese Elementary School: activities in the Tenpaku River, Nagoya, Japan**

柴田 真介\*  
SHIBATA, Shinsuke\*

### 摘 要

名古屋市立植田南小学校は、高層マンションが立ち並び、車が激しく行き交う地域に立地しているが、天白川や稲葉山公園など、自然と接することのできる場所も数多く見られる。そこで平成7年度(1995年度)は、無理なく自然の中での遊びができるように、段階を追って自然が多く残る公園で遊んだり、友達とかかわりながら自然遊園地を作ったりする活動を行った。引き続き平成8年度(1996年度)は、地域を流れる天白川を学習素材として位置づけ、水の中に入って生き物捕りをすることにした。しかし、天白川に生き物を捕りに行っても、児童は、なかなか生き物を捕ることができなかった。そこで、どうするとよいか話し合ったところ、仕掛けや水中眼鏡など、生き物を捕る道具を作るとよいことになった。しかし、実際に天白川に捕りに行くと、生き物の住んでいる場所が分からなかったり、仕掛けがうまく沈まなかったりした。そこでもう一度話し合い、「どのような場所に生き物はいるか」「仕掛けを沈ませるにはどうしたらよいか」などを考えた。このような話し合いをしてきたことで、多くの児童が生き物を捕ることができ、「生き物の動きの素早さ」、「流れる水の働き(力強さ、速さ)」、「生き物の住む場所」、「空気存在」などに気付くことができた。これらの活動を行うことで、児童は、天白川を素敵な場所と思い、自然環境を大切にしたいといけなると考えるようになり、地域の自然との関わりを深めることができた。

キーワード：生活科、小学校、河川環境、生き物捕り、自然保護

**Key words** : Seikatsuka (Living Environment Studies), Japanese Elementary School, river environment, catching of small freshwater animals, nature conservation

### 1. はじめに

名古屋市立植田南小学校(以下、本校)は、都市化が進む地域に位置し、学区の中央を走る地下鉄の周辺には高層マンションが建ち並んでいる。担任する児童35名の内、25名(約71%)がマンション住まいであり、今なおマンションの建設は進んで

\*名古屋市立如意小学校 (Nyoii Elementary School, Nagoya, Aichi, Japan)

紹介教員：野崎健太郎、椋山女学園大学教育学部

いる。このように都市化が進む学区ではあるが、天白川や稲葉山公園など自然に接することができる場所も数多く見られる。それにもかかわらず、本学級の児童の生活そのものが「自然離れ」の傾向にあり、自然への関心が低い。そこで、平成7年度(1995年度)に私は、「好奇心いっぱい自然の中で思う存分活動してほしい」と願い、生活科の授業で表1に示した活動を進めた(詳細は柴田, 2015を参照)。

表1. 生活科の授業で平成7年度(1995年度)に行った実践(柴田, 2015)

1. 無理なく自然の中での遊びへ～公園で遊ぼう～
  - ① (遊具が多い) 井口公園
  - ② (自然は少ないが木は多い) 欠下公園
  - ③ (山の自然が多く残る) 稲葉山公園
2. 友達との関わりを持った自然遊びへ～稲葉山公園に自然遊園地を作ろう～
  - ① 計画を立てよう
  - ② みんなで作ろう
  - ③ みんなで遊ぼう

引き続き平成8年度(1996年度)は、2年生の生活科で、地域を流れる天白川を学習素材として位置づけることにした(写真1)。そこで、天白川に関する関心や意欲を知る一端として実態調査を行った。「天白川で水に住む生き物を捕ったことがあるか」聞いてみると34名中9名(約26%)があると答えていた。そして、その9名に何を捕ったか聞いてみると、オタマジャクシ6名、アメンボ3名で、生き物の種類は、一人平均1.7種類と少ないことが分かった。図1には、「天白川の水に住む生き物を何種類知っているか」の結果を示した。橋の上からでも見ることのできるカメやコイを書く児童が多かったが、1種類も知らない児童が4名おり、1人あたりの平均は、2.5種類であった。



写真1. 天白川と子どもたち

この調査により児童は、「水の中に住む生き物を捕って遊ぶという経験は少なく、そこに住む生き物について、

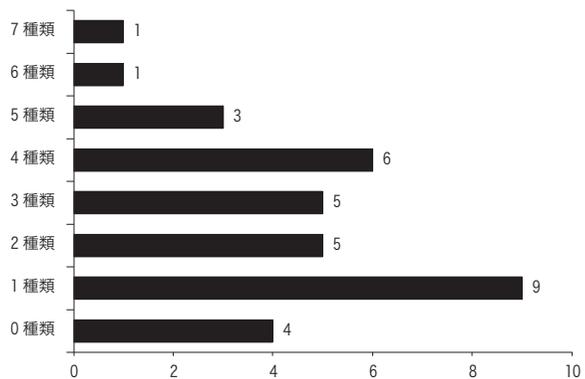
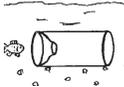
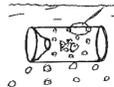


図1. 児童が知っている天白川の生き物の種類とその人数

ひいては天白川の自然についてあまりよく知らない」ということが分かった。そこで本実践では、表2に示した活動計画で、「天白川での生き物捕りの工夫」を通して、天白川に住む生き物やその住みかの様子、川の流れなど、天白川の自然に気付かせて

いくことにした。

表2. 生活科の授業での平成8年度（1996年度）の活動計画

単元名「天白川で生き物を捕ろう」 1. 生き物を捕ろう（2時間）実践1 天白川に遊びに行こう	
2. 生き物を捕る道具を作ろう（5時間）実践2 捕るための道具を作ろう 道具を持って天白川に行こう 生き物をたくさん捕ろう	
3. 道具を改造しよう（5時間）実践3 どのようにしたら生き物がもっとたくさん捕れるか考えよう 生き物をもっとたくさん捕ろう	
4. 生き物をどうしよう 捕った生き物をどうしよう	

## 2. 授業実践

この実践では、A子（表3）の活動を中心に追いかけていくことにした。

表3. A子と天白川の関係

天白川で生き物捕りをしたことがなく、天白川にどんな生き物がいるか知らない。  
 「川はぬるぬるして気持ち悪い」と考えている。  
 昨年度天白川に行ったときには、水の中に入らず、河川敷の草花で遊んだ。

### 実践1. 生き物を捕ろう～天白川に遊びに行こう

#### 1) 児童の活動の様子

暑い日が続いたある日、天白川で遊んだことを「自然からのおたより」に書いてきた児童がいた。その時のことを朝の会で発表すると、「ぼくも天白川に行きたい」、「みんなで天白川に行こう」という意見が多く出た。そこで、クラス全員で天白川に行くことにした。天白川での児童の発言を表4、採集された生き物を表5、天白川に行った後の児童の感想を表6にそれぞれ示した。A子は、川の中に入ると水の冷たさに驚いて声を上げていた。最初は川の中を歩くことを楽しんでしたが、水切りをして

表4. 天白川での児童の発言

あれっ、ここの水は温かいぞ。  
 動きが速くて逃げちゃうよ。  
 アメンボってすばしっこいね。全然捕れないよ。  
 (アメンボを) 挟み撃ちして捕ろうよ。  
 (川底の石を取って) きれいな石だな。  
 (水切りをして) やったー。できたー。

表5. 採集された生き物とその個体数

アメンボ：多数  
 モロコ：2匹  
 オタマジャクシ：2匹  
 ヤゴ：1匹  
 ミズスマシ：1匹  
 ミズカマキリ：1匹

表6. 天白川に行った後の児童の感想

A子：初めてアメンボを捕ったよ。初めてなのに2匹捕れちゃったよ。F子ちゃんに捕り方を教えてもらったからだよ。今度は魚を捕ってみたいな。
T男：天白川に魚なんていないと思ったのにいたよ。向こう側に行ったら流れが強くて怖かったよ。
R子：ミズスマシを初めて見たよ。最初は何だろうと思ったけど、友達に聞いたらミズスマシって教えてくれたよ。天白川にもミズスマシがいるんだね。

いる児童を見て、いっしょに遊び始めた。仲良しのF子がアメンボを見つけてからは、川にいる生き物捕りに関心が向くようになった。

## 2) 考察

### A子について～初体験から活動の広がりへ

「川はぬるぬるして気持ち悪い」と考えていたA子であったが、この日の暑さと他の児童の楽しそうな歓声のためか、すんなりと川の中に入って遊び始めた。水の冷たさを知り川の中を歩くことを楽しんでいたA子であったが、友達に影響され、水切り、生き物捕りと遊びを変えていった。A子の感想に「(アメンボが) 2匹捕れちゃったよ。F子ちゃんに捕り方を教えてもらったからだよ」とあるように、A子は、自分でアメンボを捕れたことに驚き、捕り方を教えてくれたF子に感謝していた。そして、「今度は魚が捕りたい」と考えていた。

### 全体について

天白川では自由な遊びをさせようと考えていたが、石取りや水切りなどの遊びはすぐに終わり、ほとんどの児童が生き物捕りとなった。この理由として、①近頃児童は生き物に興味を持ち始めており、公園や空き地でも生き物を捕っていたこと、②アメンボの大群を見付けたことなどが考えられる。

生き物の素早さに関する気付きとしては、「全然捕れない」、「動きが速くて逃げちゃう」とあるように、アメンボや小魚の動きの速さを知り、感想に書く児童が34名中14名(約41%)いた。川の水に関する気付きとしては、「(同じ川でも) ここの水は温かいよ」、「向こう側に行ったら流れが強くて恐かったよ」とあるように場所による水温の違い(9名, 約26%)や流れる水の力強さ(11名, 約32%)など、新たに発見したことに驚く児童がいた。天白川に生息する生き物に関する気付きとしては、「天白川に魚なんていないと思っていたけどいっぱいいた」、「ミズスマシを初めて見た。天白川にもミズスマシがいるんだね」とあるように、天白川に生き物がいることに驚いたり、初めて見る生き物に喜んだりする児童もいた(10名, 約29%)。生き物捕りの工夫としては、「(アメンボを) 挟み撃ちして捕ろうよ」とあるように、児童は、友達と協力し、教え合い、工夫しながら生き物を捕っていた。以上のような多様な気付きや工夫は、実際に川の水の中に入って、児童の五感で感じたことにより引き出されたものと考えられる。

## 実践2. 生き物を捕る道具を作ろう

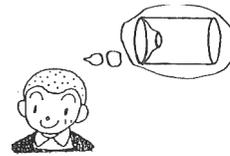
### 実践2-1. 捕るための道具を作ろう

#### 1) 児童の活動の様子

A子の感想に「今度は魚が捕ってみたい」とあるように、児童は、前回天白川に行ったときのアメンボだけでなく、「今度はモロコやオタマジャクシを捕りたい」と考えていた。そこで、どのようにしたら魚やオタマジャクシをたくさん取ることができるか考えることにした(表7)。そして翌日、完成予想図を書き必要な材料を考え、捕るための道具の製作に取り掛かった。

表7. 話し合いで出た意見

- T: 生き物を何とかたくさん捕りたいね。  
 C: ぼくたち水の中に慣れていないから捕れないんだよ。  
 C: 魚って、逃げ足速いもんね。  
 C: 釣り竿でつろうかな。  
 C: 私は網で捕ろうかな。  
 C: ぼく、本で魚を捕る仕掛けの作り方を見たことあるよ。



A子は、どのようにして魚やオタマジャクシを捕ろうか考えていた。ペットボトルの仕掛けを知り、A子も作ることにした。他に水の中を見るために牛乳パックの水中眼鏡も作ってみた。道具を作った後の感想として、「A子: ペットボトルの仕掛けができた時はすごくうれしかった。魚が入るかなと思いました。水中眼鏡はよく見えるかなと思いました」、「S子: 仕掛けの入り口を2か所にしたよ」が挙げられた。

#### 2) 考察

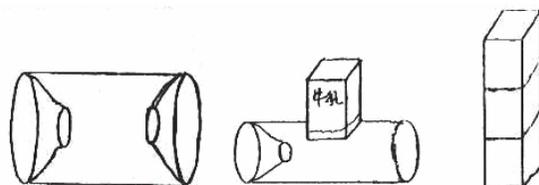
##### A子について～仕掛けに対する期待と不安

A子は、この話し合いによってペットボトルの仕掛けや牛乳パックの水中眼鏡を知り、その2つを作ることにした。作るのが大変だったためか、できたときはすごくうれしかったようである。感想の「魚が入るかな。水中眼鏡はよく見えるかな」という言葉から期待と不安が感じられる。

##### 全体について

釣り竿や網など、釣りの道具として知られているものを考えていた児童が多くいたが、仕掛けについて知っていた児童が、その説明をすると、それをきっかけに、ほとんどの児童が仕掛けを作ることにした。児童は、仕掛けについて書いてある本を調べたり、Y男のように捕る道具について、お父さんに教えてもらったりするなど、捕り方を本で調べたり、家の人に聞いたりするなど活動範囲が広がってきた。

S子の感想に「仕掛けの入り口を2か所にした」とあるように、完成した児童の道具には様々な工夫が見られた(図2)。児童の「生き物を捕りたい」という強い願いと意欲が、以上のような捕り方を調べたり仕掛けを工夫したりする活動を引き出したと考える。



[仕掛けの入り口が2か所][中の魚の様子が見られる][深い水の中が見られる]

図2. 子どもたちが考えた生き物を捕る道具

## 実践2-2. 道具を持って天白川に行こう

### 1) 児童の活動の様子

仕掛けや水中眼鏡など、児童の作った道具を持って天白川に行った（写真2）。天白川での児童の発言は表8に示した。

表8. 天白川での児童の発言

- C：仕掛けをどこにしたらいいの。ぜんぜん分からないよ。  
 C：ここは流れが強いから流されそうだな。  
 C：中に石を入れたら？  
 C：よし。水中眼鏡でいい石を探そう。



写真2. 手作りの道具を仕掛ける

A子は、どこに仕掛けたらよいか分からず川の中を歩き回っていた。友達に聞き、F子と一緒に木の近くに仕掛けた。しかし、仕掛けたといっても、川の中に入れたというだけで、右図のように空気は抜け切れておらず、入り口部分は浮いていた（図3）。道具を仕掛けた後の児童の感想は表9に示した。

表9. 天白川で道具を仕掛けた後の児童の感想

- A子：最初仕掛けるところが見つからなかったよ。F子ちゃんに聞いて木の近くに仕掛けたよ。明日魚が入っていたらいいな。  
 R男：仕掛けが浮いてきちゃって困ったよ。水をいっぱい入れたら沈んだよ。  
 K男：仕掛けの中に入れる石を探そうと思って水中眼鏡で見たら、ちっちゃい石が流れていたよ。



図3. 空気によって浮き上がったA子の道具

### 2) 考察

#### A子について～仕掛けた場所と仕掛けの様子

どのようなところに仕掛けると魚やオタマジャクシが捕れるか分からなくなったようである。友達に「木の近くに魚がいっぱいいるからそこに仕掛けるといい」ということを聞き、F子といっしょに木の近くに仕掛けることにした。しかし、空気が抜け切れておらず、仕掛けの入り口部分が浮き、魚が入ることが難しいことから、空気存在や魚の生活には気づいていないことが分かる。

#### 全体について

天白川での様子に「仕掛けをどこにしたらいいのかな。全然分からないよ」とある

ように、A子と同様どこに仕掛けをするとたくさん生き物を捕ることができるのか分からない児童が多くいた。また、仕掛けが流されそうになったり浮いたりしても、何も気にしない児童もいた。それは、流れる水の力強さや生き物の生活、空気の存在などに気付いていないためと思われる。しかしその一方で、仕掛けが水中で安定せず「浮いてくる」、「流されそう」になると、「仕掛けに水を入れて空気を抜く（R男）」、「仕掛けに石を入れて流されにくくする（K男）」など工夫して仕掛けを安定させようとする児童もいた。K男の感想に「水中眼鏡で川の中を見たらちっちゃい石が流されていた」とあるように川の中を流れる石を見て驚いている児童もいた。このような新たな気づきや問題解決の姿勢を大切にしていきたい。

**実践2-3. 生き物をたくさんと捕ろう**

**1) 児童の活動の様子**

前日の仕掛けに生き物が入っているか期待でいっぱいの子は、中をのぞく目もはらはらどきどきといった感じで仕掛けを川底から出していた。仕掛けなどで生き物が捕れたのは、31名中20名（約65%）であった（図4）。生き物の数も、最初に天白川に来た時はアメンボを除いて7匹であったのが、今回は41匹と6倍近く増えた（表10）。

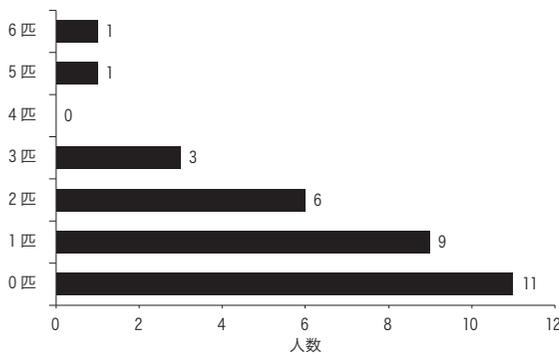


表10. 天白川で採集された生き物（2回目）

フナ	17匹
モロコ	2匹
ヒル	8匹
ヤゴ	5匹
オタマジャクシ	4匹
ミズスマシ	3匹
ミズカマキリ	2匹

図4. 1回目に児童が捕った生き物の個体数とその人数

A子は、生き物が入っているか、心配そうにF子と木の近くの仕掛けを見に行った。F子の仕掛けには魚が入っていたがA子には入っておらず、残念そうであった。そして、もう一度やりたいと話していた。児童の感想は表11に示した。

表11. 初めて作った道具を用いての生き物捕りを終えた後の児童の感想

- A子：ちゃんと仕掛けに入っているか心配だったよ。私のところには入っていなかったよ。でもF子ちゃんのところには魚が入っていたよ。
- E子：1匹も捕れなかったよ。どうして捕れなかったんだろう。Y子ちゃんと「悔しいね」って言っていたんだよ。
- J男：仕掛けた場所に行ったら仕掛けがなかったよ。きっと流されちゃったんだよ。今度は絶対捕りたいな。

## 2) 考察

### A子について～浮く仕掛けに気付かず

F子と同じ場所に仕掛けたA子だが、F子の仕掛けとの違いは、浮いているか浮いていないかであった。しかしA子はそのことには気付いていなかったようである。

### 全体について

F子のように、小魚やオタマジャクシを捕った児童はうれしそうであった。しかし、A子や感想に「1匹も捕れなかったよ。悔しいね」と書いたE子のように、1匹も捕れなかった児童やヒルしか捕れなかった児童はとても残念に思い、もう一度やってみたくて考えていた。また、A子や感想に「仕掛けた場所に行ったら仕掛けがなかったよ。きっと流されちゃったんだよ」と書いたJ男のように、生き物が捕れなかった児童の多くは、仕掛けが流されたり浮いたりしていた。このように、天白川の自然に気付かず生き物捕りに失敗した児童が、意欲もしばまず「もう一度やりたい」と考えたのは、生き物捕りに成功した児童が20名と多くいたためと考えられる。図5には、実践2までの時点における自然への気付きに関する主な感想をまとめた。4名の児童が、空気存在に気付くことができたのは、ペットボトルで作った仕掛けの工夫により引き出されたものと考えられる。

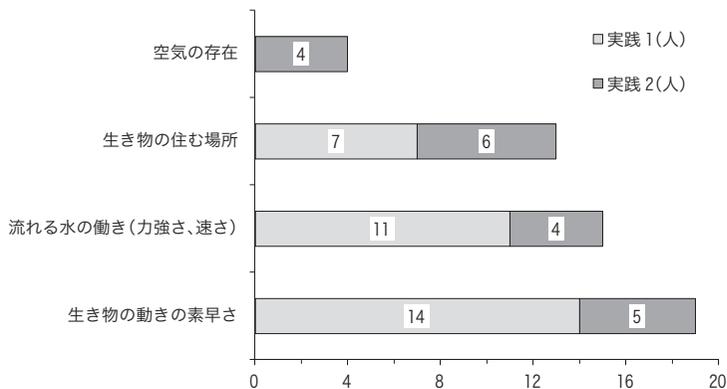


図5. 実践1と2で見られた児童の気付き（感想より）とその人数

## 実践3. 道具を改造しよう

### 実践3-1. どのようにしたら生き物がもっとたくさん捕れるか考えよう

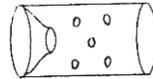
#### 1) 児童の活動の様子

A子やE子を始め、もう一度生き物捕りをやりたいと考えていた児童が多くいたため、仕掛けなど生き物を捕る道具についての工夫をもう一度話し合うことにした。この話し合いでは、「仕掛けを沈ませるためにはどのようにしたらよいか（空気存在）」、「仕掛けが流されないようにするにはどのようにしたらよいか（流れる水の力強さ）」、「仕掛けをどのような場所に置いたらよいか（生き物の生活）」などについて話し合った（表12）。そして児童は、この話し合いを参考に仕掛けを改造した。

表12. 仕掛けを試した後の話し合いの様子

**空気存在**

C：仕掛けが沈まないんだよ。  
C：仕掛けに穴を開けるといいよ。



**流れる水の力強さ**

C：仕掛けが流されてなくなっちゃった。  
C：紐で木に結ぶといいよ。

**生き物の生活**

C：どういふところに仕掛けたらいいの？  
C：草がボーボー生えているところに魚がいるから、そこに仕掛けたらいいよ。

話し合いによりA子は、魚を捕れなかったのは仕掛けが沈まなかったからと考え、ペットボトルに空気を抜くための穴を開けることにした。また、仕掛けが流された児童がいたことを知り、流されないように、仕掛けと木を紐で結ぶことにした。A子は、F子とともに、前回仕掛けた場所と同じ所に仕掛けていた。そして、「仕掛けを沈める時ブクブクいっていたよ」と空気が抜ける時のことを話していた。仕掛けを改造した後の児童の感想は表13に示した。

表13. 仕掛けを改造した後の児童の感想

A子：仕掛けが浮かぶから穴を開けたよ。仕掛けが流されないように紐を穴に通して縛っておいたよ。今度は魚が捕れるといいな。  
Y子：仕掛けた場所も草の所に変えたよ。魚の大群も見たよ。今日は入るかな。  
N子：大きい魚が入るように、大きい口のペットボトルで仕掛けを作ったよ。

**2) 考察**

**A子について～広がる気付き**

この話し合いにより、仕掛けの中の空気存在に気付いた。A子は、実際に仕掛けたときに「ブクブク抜ける空気」を実感することができた。また、水の流れが緩やかな場所でも仕掛けが流されることがあることを知り、流れる水の力強さを改めて知ることができた。

**全体について**

Y子の感想に、「仕掛けた場所も草のところに変えたよ」とあるように、仕掛けなどでうまくいかなかったところをクラス内で話し合った児童は、仕掛けの中にある空気存在や川の流れの力強さ、生き物の生活の様子などに気付いていた。児童は、目的をもって仕掛けを改造することができ、どのような場所に仕掛けたらよいかも知ることができた。「大きい魚が入るように大きい口のペットボトルで仕掛けを作った」N子の感想にあるように、さらに次の目標に向かって工夫を重ねる児童もいたことは嬉しい結果であった。自然の様子にじかに触れ、次の目標に向かって工夫を重ねていったことがこのような結果をもたらしたと考える。

### 実践3-2. 生き物をもっとたくさん捕ろう

#### 1) 児童の活動の様子

前日の天白川の仕掛けを見に行った。児童は、天白川に着くと一目散に仕掛けた場所へかけ出し、中をのぞいていた。そして、生き物を捕ることができると「やったー」と歓声を上げて喜んでいて（写真3、4）。A子はF子とともに、前回と同じ場所の仕掛けを見に行った。「入っていた！」A子はとても喜んでいて。A子の仕掛けにはフナが一匹入っていた。仕掛けなどを改造したことにより、35名中29名（約83%）の児童が生き物を捕ることができた（図6）。また、生き物の数も、前回の41匹が96匹と2倍以上になった（表14）。児童の感想は表15に示した。



写真3. 仕掛けに入った生き物



写真4. 生き物を観察する子どもたち

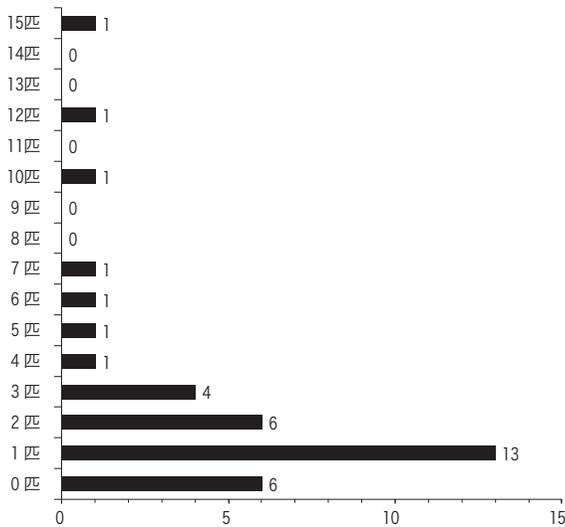


図6. 2回目に児童が捕れた生き物の個体数とその人数

表14. 天白川で採集された生き物（3回目）

フナ：63匹
モロコ：3匹
モツゴ：2匹
ドジョウ：2匹
タナゴ：1匹
オタマジャクシ：11匹
ヒル：9匹
ヤゴ：3匹
ミズカマキリ：1匹
マキガイ：1匹

表15. 改造した仕掛けで生き物を捕った後の児童の感想

- A子：今日、天白川に行ったら魚が入っていたよ。とってもうれしかったよ。目とか尻尾がかわいかったよ。またやりたいな。
- M子：仕掛けがあるところに行ったら、また仕掛けが流されていたよ。川ってものすごい力があるって初めて知ったよ。でも、少し悲しくなっちゃった。
- H男：ヤゴ1匹とフナ2匹を捕まえたよ。けどもっと捕まえたいな。今度は、お父さんと行こうかな。

## 2) 考察

### A子について～興味・関心の高まり

A子は初めて魚を捕ることができた。捕った魚を「かわいい」と表現するほどうれしかったようである。「またやりたい」という言葉からも、生き物捕りの楽しさが分かる。

### 全体について

児童は改造した仕掛けで生き物を捕ることができ、とてもうれしそうであった。工夫することの大切さや楽しさを学んだようである。「また仕掛けが流されたよ。川ってすごい力があるって初めて知ったよ (M子)」とあるように、川の力強さを思い知った児童もいた。H男の感想に「今度はお父さんと行こうかな」とあるように、授業後も天白川に行って生き物捕りをしたいと新たな願いをもった児童もいた。

実践1～3で見られた児童の気づきを図7にまとめた。実践3で、流れる水の力強さに気付いた児童が15名、生き物の住む場所に気付いた児童が14名、空気の存在に気付いた児童が20名と多く増えたのは、「どのようにしたら生き物をもっとたくさん捕れるか」話し合ったことによるものと考えられる。

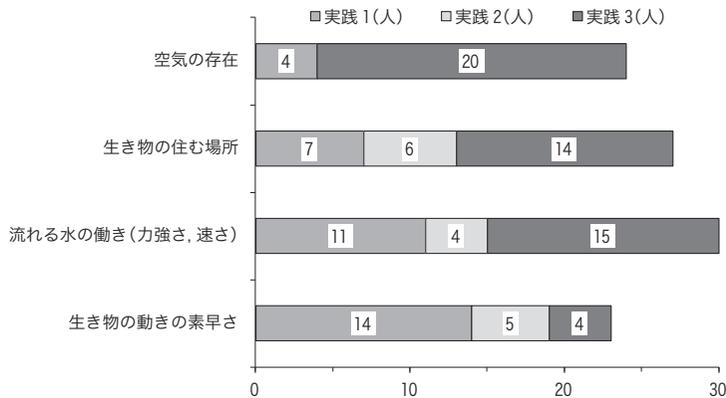


図7. 実践3までに見られた児童の気づき (感想より)

## 3. 実践のまとめ

2学期のはじめ、教室に行くと、水槽にたくさんの魚や虫、ザリガニが入っていた。児童に聞くと天白川で捕ってきたそうである。A子に話を聞くと、夏休みに父親と天白川に行き、生き物捕りをしたそうである。児童に、「夏休みに天白川に行って遊んだか」聞いてみると、33名中25名(約76%)の児童が天白川に行って遊んだと答えていた。そして、そのうち、水に住む生き物を捕って遊んだ児童が19名いた。

実践後、天白川の水に住む生き物を何種類知っているかを再度聞いてみた。クラス全体で、実践前は一人平均2.5匹であったのが、実践後は4.8匹となり、約2倍となった。中には9種類もの生き物を答える児童もいた。A子は、実践前は0種類であった

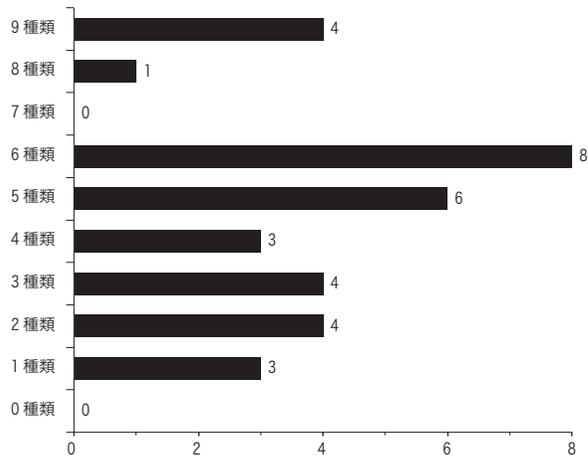


図8. 実践後の児童の知っている天白川の生き物の種類とその人数

のが、実践後は、アメンボ、フナ、カメ、オタマジャクシの4種類を答えた（図8）。地域を流れる天白川で生き物を捕る活動を行ったことにより、地域の自然とのかかわりを深めていったことが分かる。この実践によって、児童は、地域の自然に対し、次のような見方や考え方ができるようになった（表16）。

表16. 本実践後の天白川に対する児童の意識

A子：天白川は「ぬるぬるして気持ち悪い」と考えていたが、「かわいい生き物がいっぱいいて楽しい」と考えるようになり、夏休みにも遊びに行くようになった。
H男：「自然からのおたより」に「きのう天白川で遊んでいたら、自然を壊しているようなものを見たよ。橋の上からたばこを捨てるのを見たよ。一瞬びっくりしたよ」とあった。自然環境を大切にしないといけないという意識が芽生えてきた。
T子：「自然からのおたより」に「公園でスズメが紐に絡まっていたので、かわいそうだと思って紐をほどいてあげました」とあった。生命を大切にする心が育ってきた。

これからも、地域素材を身近に感じるような活動を構成し、地域の自然とのかかわり方をより深める生活科学習のあり方を探求していきたい。本学級の児童を2年間受け持ち、私は「好奇心いっぱいに自然の中で思う存分活動できる児童」を目指し実践してきた。児童の生活の中にはまだまだ電子ゲームの影響が根強く残っている。しかし、この2年間の実践は「子供の自然離れ」の歯止めにはなったのではないだろうか。

#### ■引用文献

柴田真介（2015）：友達と関わりながら自然に関心を持たせる生活科学習—自然遊園地作りの実践を通して—。椋山女学園大学教育学部紀要，8：169-178。